



1. 駅方向から見た全景

YOKOHAMA OHDORI PARK

by City of Yokohama & CABINET REN SUZUKI

2. 手前から水の広場、サンクンガーデン、みどりの森を見る



S=1:600

横浜市大通り公園

3. 水の広場



横浜市大通り公園計画について

田村 明

緑の軸線構想

横浜の大通り公園は緑の軸線構想の一貫として計画された。横浜の中心市街地は、山手と野毛の二つの丘の間に挟まれた狭いデルタにある。デルタの三角形のちょうど中心線に緑の軸線が1本通ることは、密集した市街地に、うるおいと憩いの場を提供するし、またいざという場合の防災や避難の線としても役立つことになるだろう。緑の軸線は港に向かう。横浜公園から日本大通りを通って、水際線を生かした横浜らしい臨港公園である山下公園に結びつくのである。

横浜の中心市街地は、関東大震災によって壊滅し、さらに第2次大戦の空襲によって再び焼土と化した。そのうえ兵站基地として接收され、中心地にはカマボコ兵舎が建ち並ぶ殺風景な荒地に化してしまった。この荒廃した中心部の復興には、新しい人間的な魅力ある空間が是非必要である。都市は必要な機能に加えて、人間の心に訴える直接の機能以上の要素が必要である。そうした要素が多ければ多いほど、心豊かで個性的で魅力ある都市になることができる。

緑の軸線は、公園や、銀杏並木の大通りによって構成されているが、たんに道路や公園だけではなく、これに接する街区や建築物も含めて考えられている。それらもまた、緑の軸線にふさわしい形態や、外壁を整え、小広場、植栽などを備えて、緑の軸線の内容を豊富にし、厚味を増してゆくのである。

美しい公園や道路は、それだけで完成した事業ではなく、周辺の街全体によい影響を与え、各建築物を扱う多くの人びとと相呼応してはじめて、都市づくりに対して戦略的な意味をもつものとなるのである。

大通り公園か、高架道路か

大通り公園は吉田川の埋立てによって、細長い1.2kmの公園として生まれた。この川岸は、船の物置場として用いられ、両岸には倉庫などが並び、港湾貨物が出入りしていた。ところが戦後は、トラックによる貨物輸送に代わり、運河の機能は消滅し、地盤沈下によって満潮時には溢水したり、また橋桁も沈下して、十分な波瀬もできず汚水によって汚れたドブ川に化していた。

横浜の復興のなかで新しい都心の機能が必要である。そのひとつとして地下鉄が計画され、この機能を失い汚れた川を埋立ててその下に通し、上は緑の軸線の中心となる大通り公園として計画された。

さらに、戦後の接收によって新しい街路計画はできなかつたが、急激な自動車時代を迎えて、これに応ずるためには街路の代替をする自動車専用道路が計画された。この道路は新たに設立された首都高速道路公団の手によることになる。ところが、この道路を入れる余地がほとんどないために、せっかくの緑の軸線である大通り公園の入口に大インター・チェンジを設け、高架のまま細長い公園予定地の上を抜ける計画が立てられた。たしかにこの細長い空間は道路を建設しやすいし、これによって空く見くくることはできる。

しかし、大通り公園が無くなってしまうことはもちろん、丘に挟まれた狭い都心部の真中を高架道路が縦横に走ることになれば、都心部は分断され、引き裂かれてしまう。これではせっかく道路という新しい機能が加わっても、そのために失われるものもありにも大きいのである。

都市計画とは、個別事業とは違い一方的な価値観に立つものではなく、道路、地下鉄、公園などの機能をそれぞれ認めながら、これらの価値を共存させる技術である。そこで道路を半地下にし、かつ大通り公園から迂回させる計画が立てられた。この横浜市の計画は、金がかかる、時間がかかる、地下鉄との調整がうまくゆかないなどの理由で極めて難行したが、新しい総合的価値を生み出そうという意欲とねばり強い説得によって、やっと横浜市の計画が認められた。これによって道路は地下ないし半地下となって、大通り公園の入口にも広びろとした空間と緑が得られ、また大通り公園は 1.2km に及ぶ市民への将来にわたってのプレゼントとなつた。

その後、道路もただ安いというだけではなく、環境を考慮したものでなければならぬという思想も生まれてきた。ひとつの機能も、その機能だけではなく、他の機能や機能以上の価値と共存できなければならないのである。

大通り公園計画

横浜の大通り公園は、札幌の大通り公園に比べれば、6割程度の幅員しかない。しかし、広漠たる開拓地に取るのではなく、すでに密集し、都市圧力が強く、さまざまの力が競合するところで大通り公園を確保するのには、それ以上何倍かの力が必要である。この公園は、多くの目に見えない大きな努力によって困難を克服して生まれた。しかし、それだけに、見える公園としても、構想や意図がよりよく生かされなければならない。

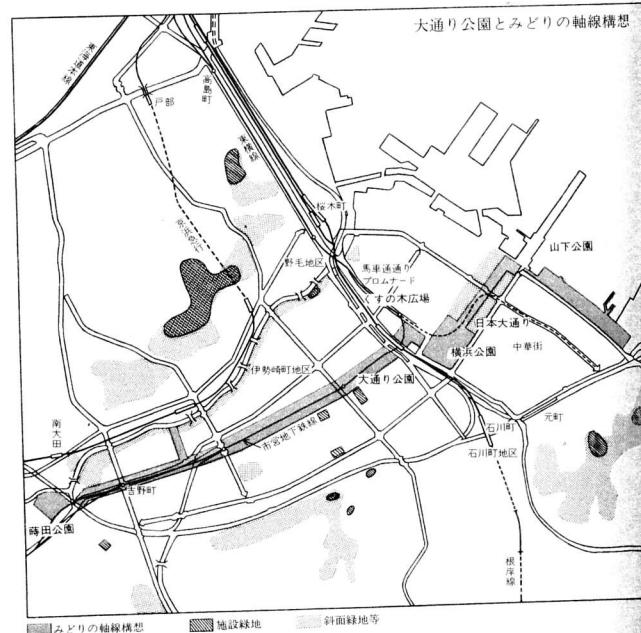
そこで、大通り公園計画委員会を設け、都市計画、造園、建築などの専門家によって基本計画をまとめ、多目的広場としての“石の広場”，憩いの場としての“水の広場”，そして“みどりの森”という三つの部分に分けた。その計画や設計は別記の人びとによって行なわれたが、さらにもっと市民に親しめ、公園全体の風格を備えるために、屋外彫刻を置くことが考えられた。これも資金問題、場所の問題、内容の問題など数年間にわたるさまざまな論議や研究など長い経過を経て、ロダンの『瞑想』と、ヘンリー・ムーアの『三つの部分からなるオブジェ』に決まった。それぞれの置かれた位置も、大通り公園彫刻選定委員会（会長：本間正雄）によって定められた。

公園周辺と今後

大通り公園は緑の軸線構想として、けっして単なる公園計画だけで終わるものではない。これは町づくりの物的な軸のほか、戦略的な他への刺激や影響を与えてゆくものなのである。

すでに大通り公園の入口の土地を地下鉄の変電所用地として買収したものを利用し、市の教育文化会館とし、前川國男氏に依頼して、周辺地区の模範となる赤煉瓦タイル張りの建築物をつくった。この公園に面してもう一つの市の建物である消防署も、小さいながら赤煉瓦の時計塔をもつユニークな設計である（設計：氏家隆正）。これがよい刺激になって、今までに裏通りにすぎなかったこの周辺に、ひとつの風格が長い間につくり出されてくることになろう。さらに今までみすばらしかった内駅も、国鉄側の配慮で薄煉瓦色が塗られた。将来にもっと本格的な改裝が必要であろう。

町づくりは市役所だけがするのではない。市役所は軸となる質の高いものを生み出すことにより、町の方向づけと個性化を図り、長く継続的に方向性をつづけて市民全体の力で少しづつ高い質へと変わってゆくのである。



なら
地の機

。し
しまざ
刃が必
くて生
むかさ

こよっ
“水の
は別記
各を備
直、内
ンの
と。そ
って定

うでは
ごゆく

利用
瓦
る消防
隆正)。
つの風
った関
る要で

とみ出
て市民

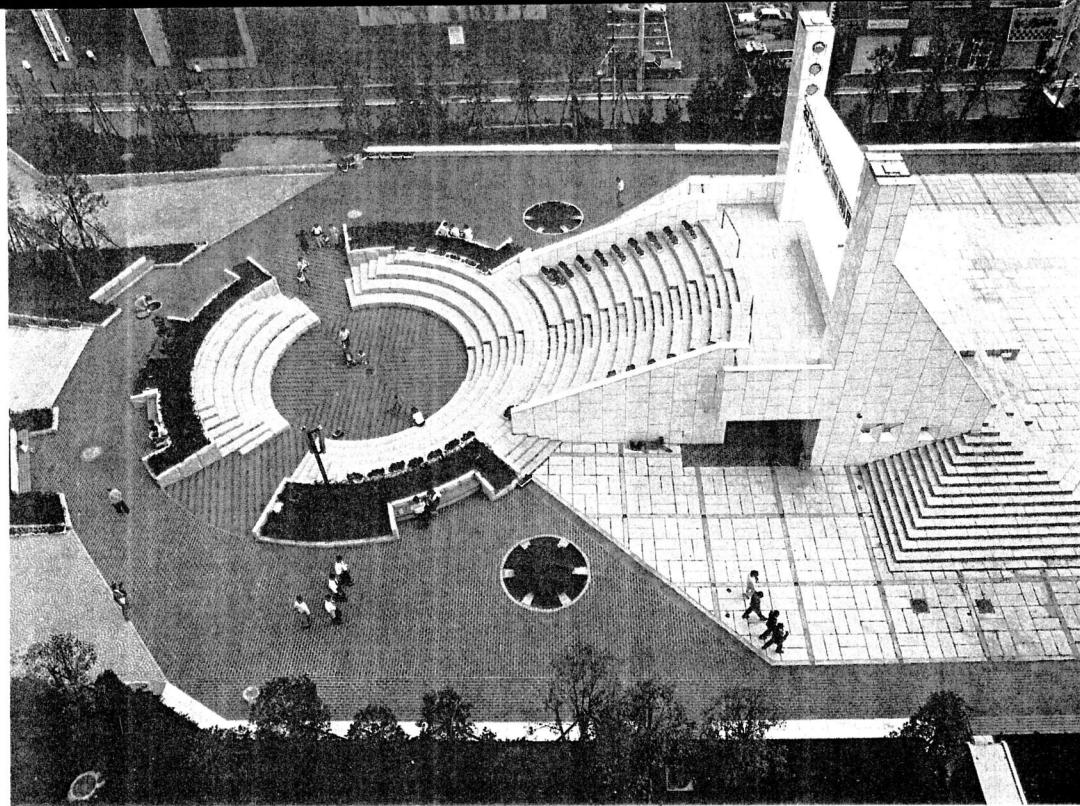
構想



S=1:4000

site plan
全体配置

サンクンガーデン



4. 北側から見たステージ

5. 西側から見たステージ



基本構想

横浜市企画調整局

環境開発センター（浅田 孝）

基本設計

横浜市

大通り公園設計委員会（委員長：横山光雄）

レン設計事務所（進来 康・広畑哲治）

実施設計・監理

●みどりの森・石の広場／横浜市緑政局

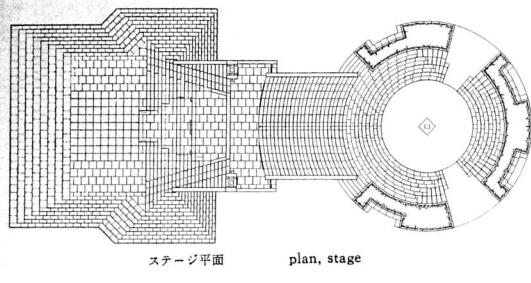
●サンクンガーデン／横浜市緑政局・横浜市交通局

●水の広場／レン設計事務所（実施設計）

横浜市緑政局（監理）

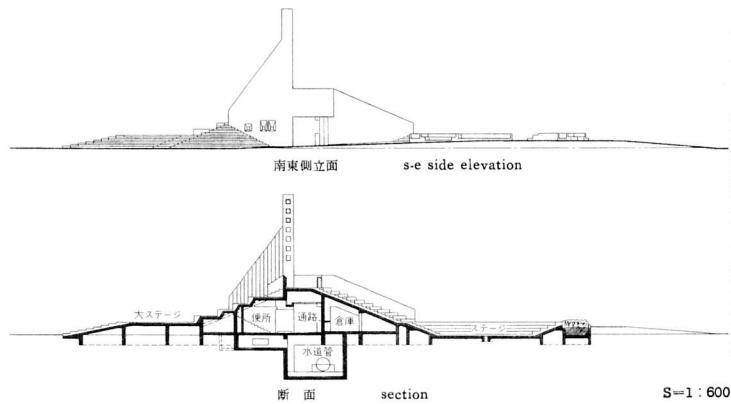
●野外ステージ（石の広場）／レン設計事務所（実施設計）

横浜市建築局（監理）



ステージ平面

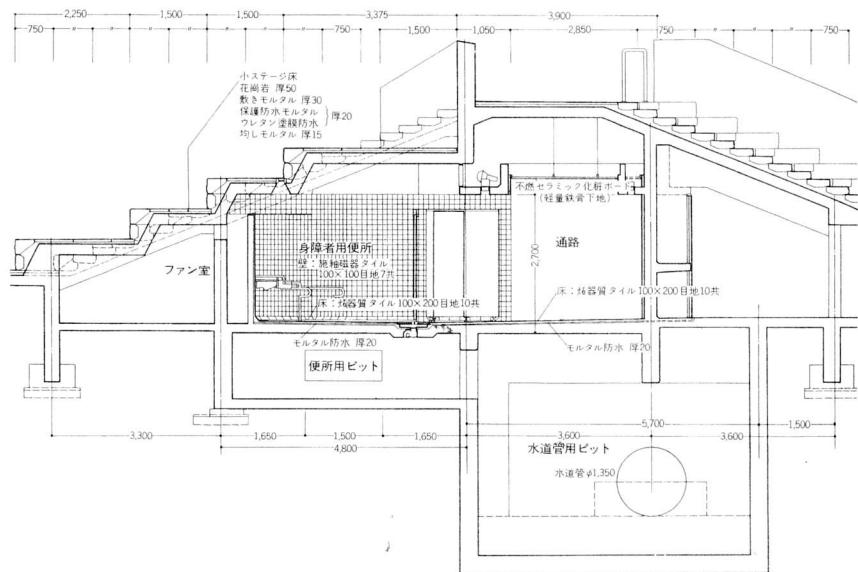
plan, stage



S=1 : 600



6. 北側からステージを見る

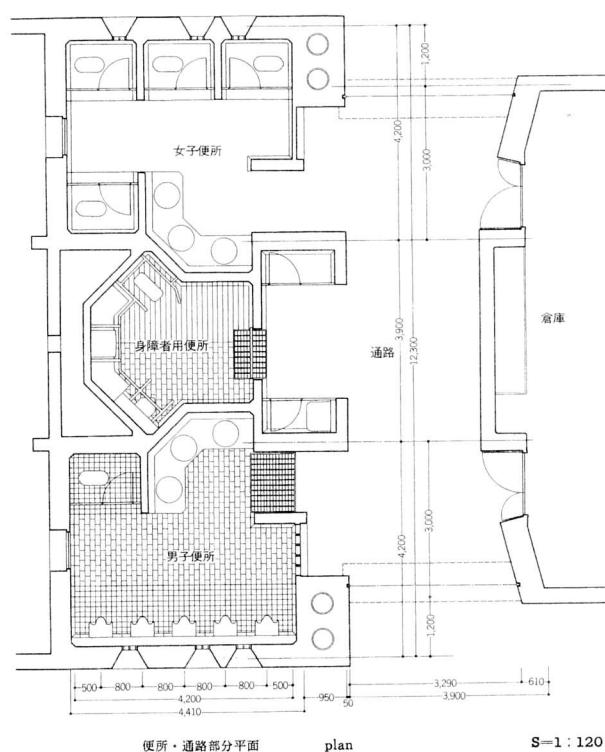


便所・通路部分断面

section



7. ステージ下の通路



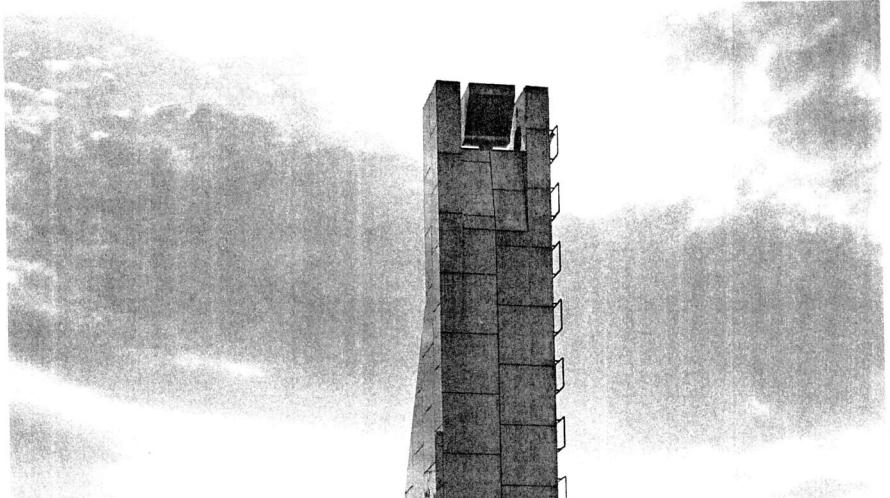
便所・通路部分平面

plan

S=1 : 120



9. ステージ大袖壁



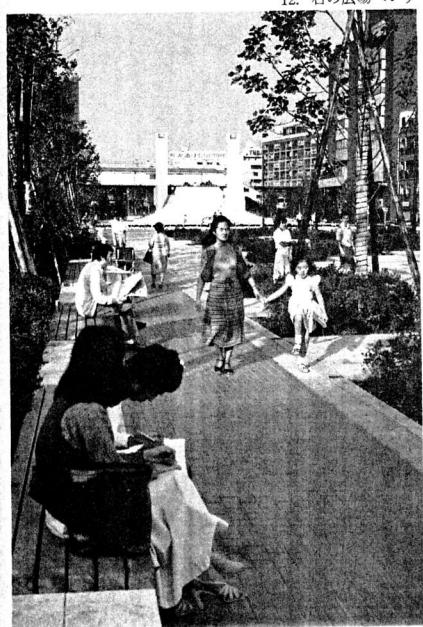
11. 換気筒夕景



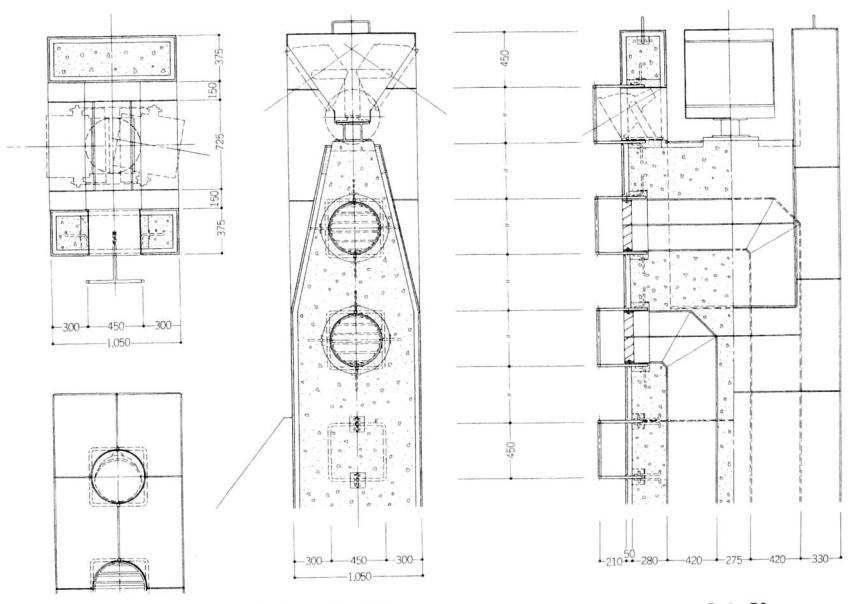
10. ステージ階段



12. 石の広場ベンチ



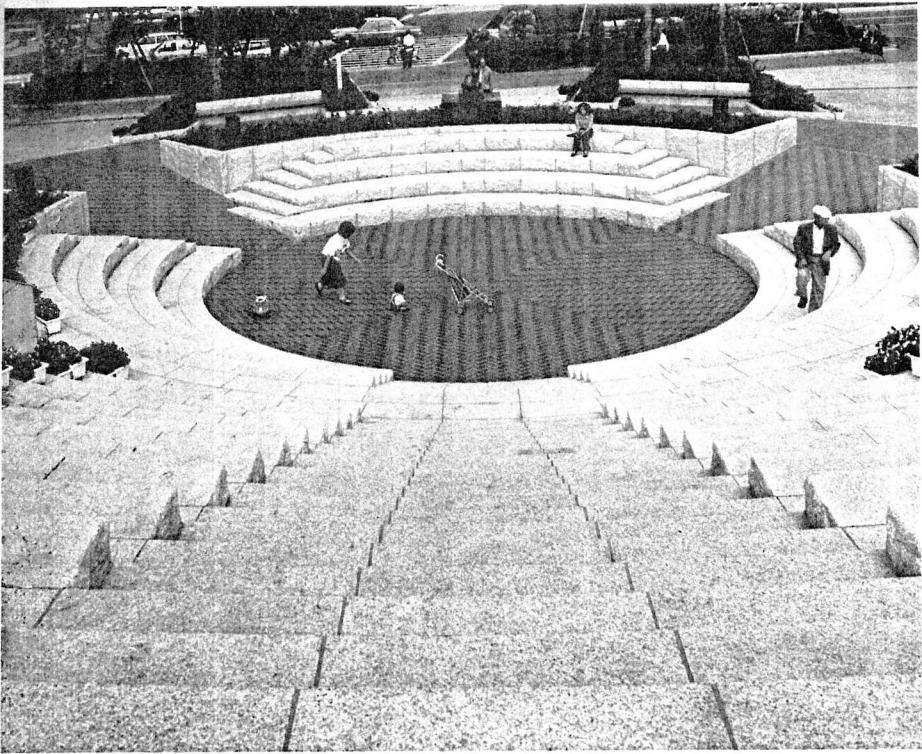
12. 石の広場ベンチ



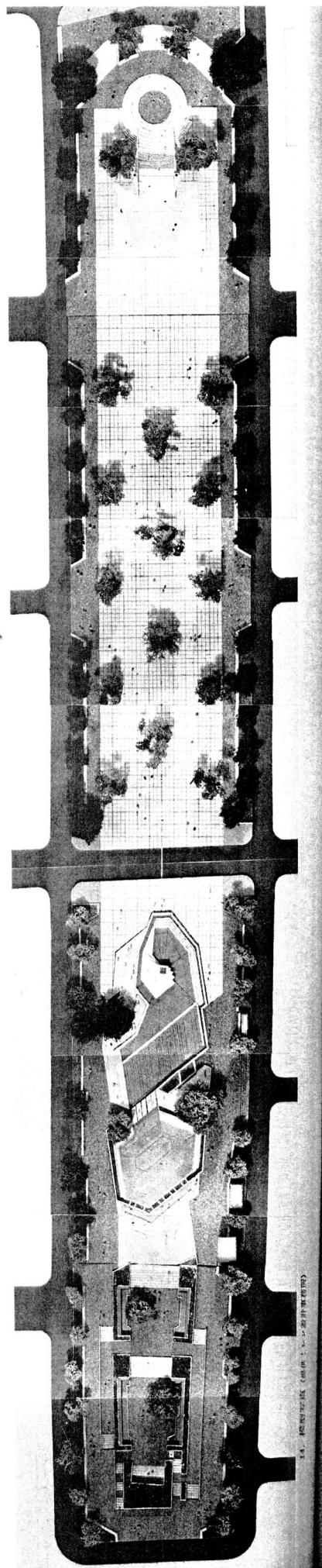
換気筒・投光器詳細

detail

S=1:50



13. 円形ステージ



計画に参加した設計者の一人として

進来 廉

市全体の『みどりの軸線』を形成し、横浜の新しい顔となる都心部開発の手立てとして出発し、すでに約10年経った。そして今回、その“軸”となるものの具体的な下地が整ったといえよう。この種の計画には“完成”というものはなく、“段落”または“コンマ”の過程を繰り返すわけである。そして、これから本番に入り、周辺の生き生きとした変化が期待される。

われわれがこの計画の一部に参加したのは約6年前の基本設計で、その後、水の広場と、石の広場の野外ステージの実施設計を行なった。公園全体の構想に関する概念や哲学は他に譲るとして、具体的にわれわれが意図したことの主要点を簡単に述べることにする。

計画に対して、フィジカルに二つの大きな与条件が存在した。

第1番目には、「軸」であるから細長いということを意味し、したがってみどりの森、水の広場、石の広場等の前に“細長い”という形容詞がつくのである。

したがって、水の広場は幅が狭いから、大きな噴水は期待できない。それで、水そのものの動きを、四季感とともに変化をもたせることを考えた。具体的には、水の動きは三つの部分に分かれ，“あふれ出る水源池”“せせらぎ”そして“淀み”となって変化し、夏の暑い時には子供たちが水遊びもできるようにと考えたが、現時点での安全性や管理の問題から100%は実現できなかった。当初の案では、ピラミッド形の水源池ではなく、水自体を逆流させて吹き出すことを考え、实物模型で幾度か実験したが、“省エネルギー”という点で断念した……。

石の広場も車の入らない細長い広場で、サンビエトロ

広場との比較にもならない。ここではむしろ、都心部での日常的な使われ方に意味があり、朝市、ノミの市、バザール等が行なわれやすい仕掛けを用意した。

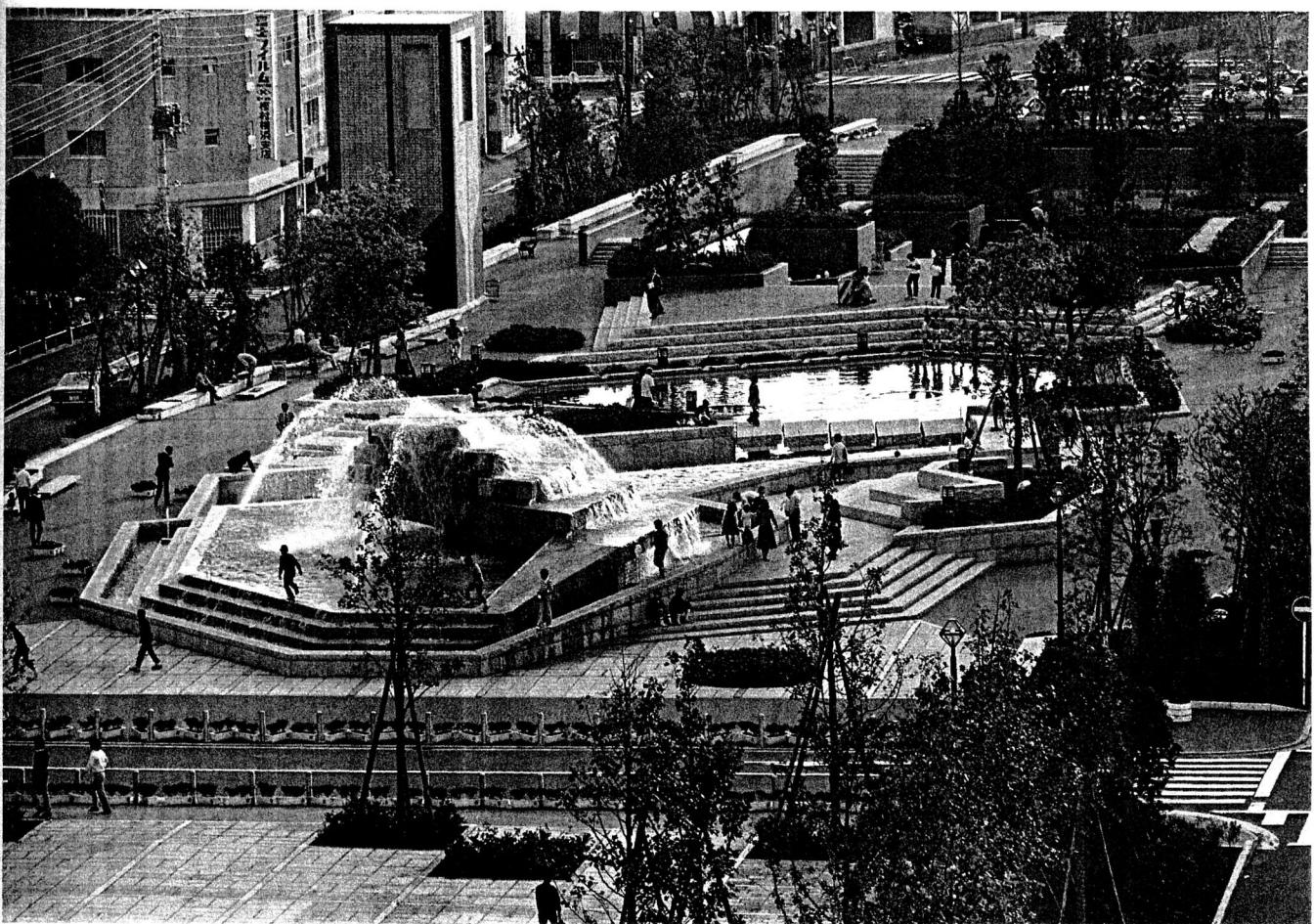
野外ステージも、その日常的な活動を補足し、助長できるように考えたものである。凸と凹の形を組み合わせた二つのステージは、そのための道具であって、それをいかに使用するかは、ここに集まる人びとによって決められよう。

次に、第2番目は「軸」に接する周辺の変化に対し、われわれができる“働きかけ”は何であろうかということである。

1.2kmもある細長い公園の周辺に対する“働きかけ”は、法規制は別として、単なる設計者は周辺の未来像を提案するが、不幸なことに彼は常に裏切られている。

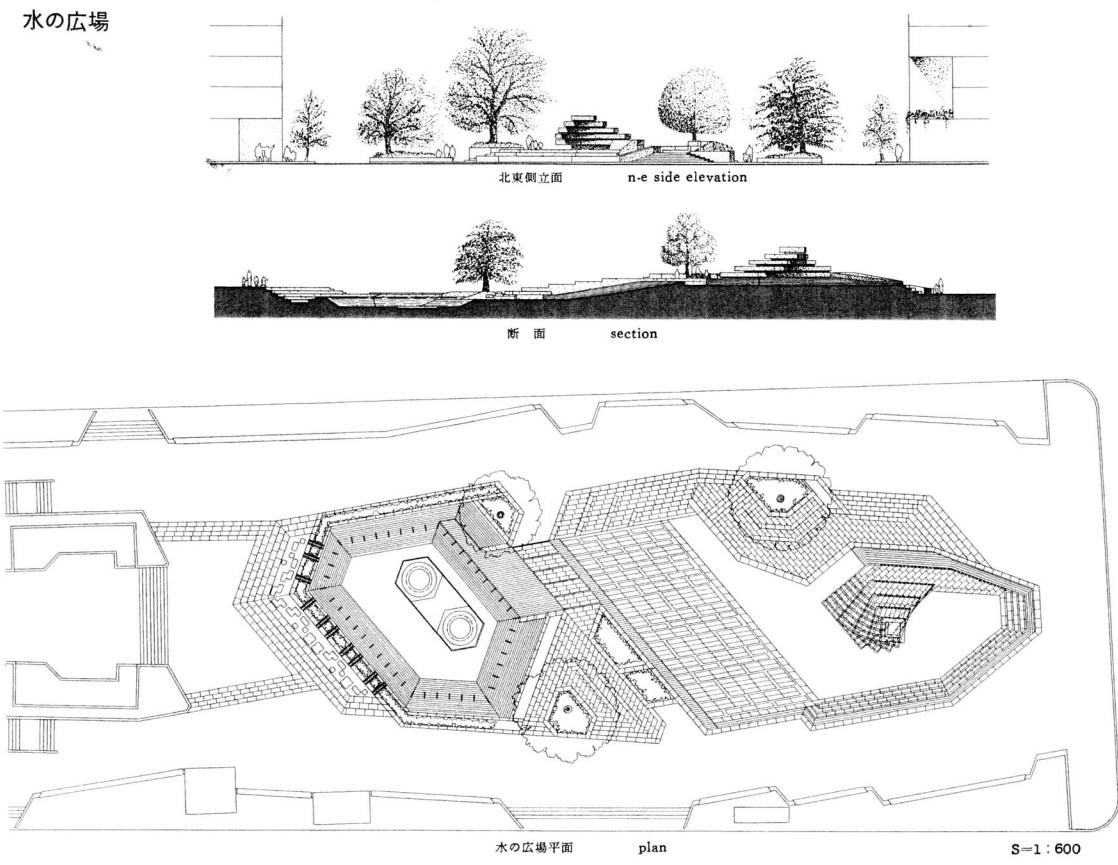
この周辺には、スタイル、材料、色調等、はっきり界隈性を意識させるようなものはない。したがって、あるスタイルを提案するまえに、“健全な材料”や“ある色調”的存在を働きかけるほうが先であるという考え方の下に、われわれは、最近完成された教育文化センターの外壁の材料と色調に同意し、それに準ずることに決めた。石の広場、水の広場、サンクンガーデン、みどりの森と、そこに使用されている材料や色調の一部は、一つの連続性をもっている。さらにごく最近新築された消防署の外壁は、設計者の理解によって、今後の変化に明るい期待をもたせてくれる。

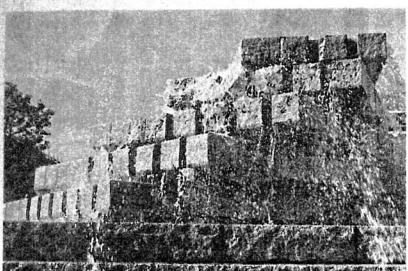
大通り公園とその周辺も、これから多くの人びとの賛同や反対や無視によって変化し、成長してゆくのであるが、われわれの意図した方向に少しでも進んで行ってくれることを願ってやまない。



15. 北側から見た水の広場全景

水の広場





16. 水源池（湧き）部分



17. 水源池（湧き）部分



18. 水の広場夜景



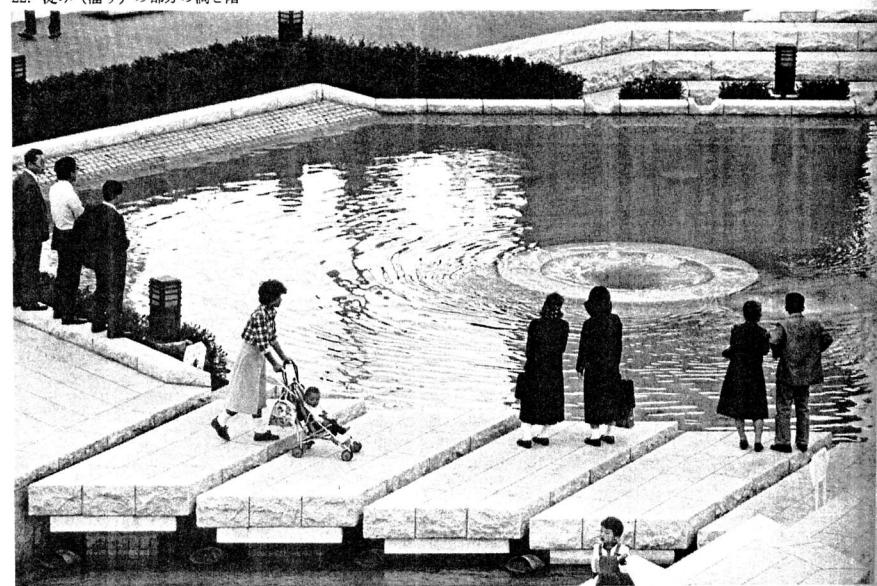
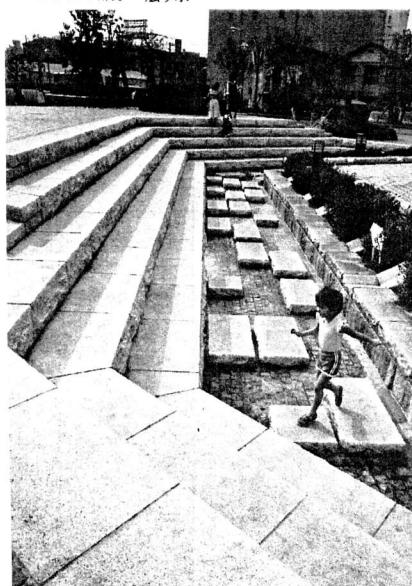
19. せせらぎ

21. あふれの部分 “触り水”



20. 水源池（湧き）部分

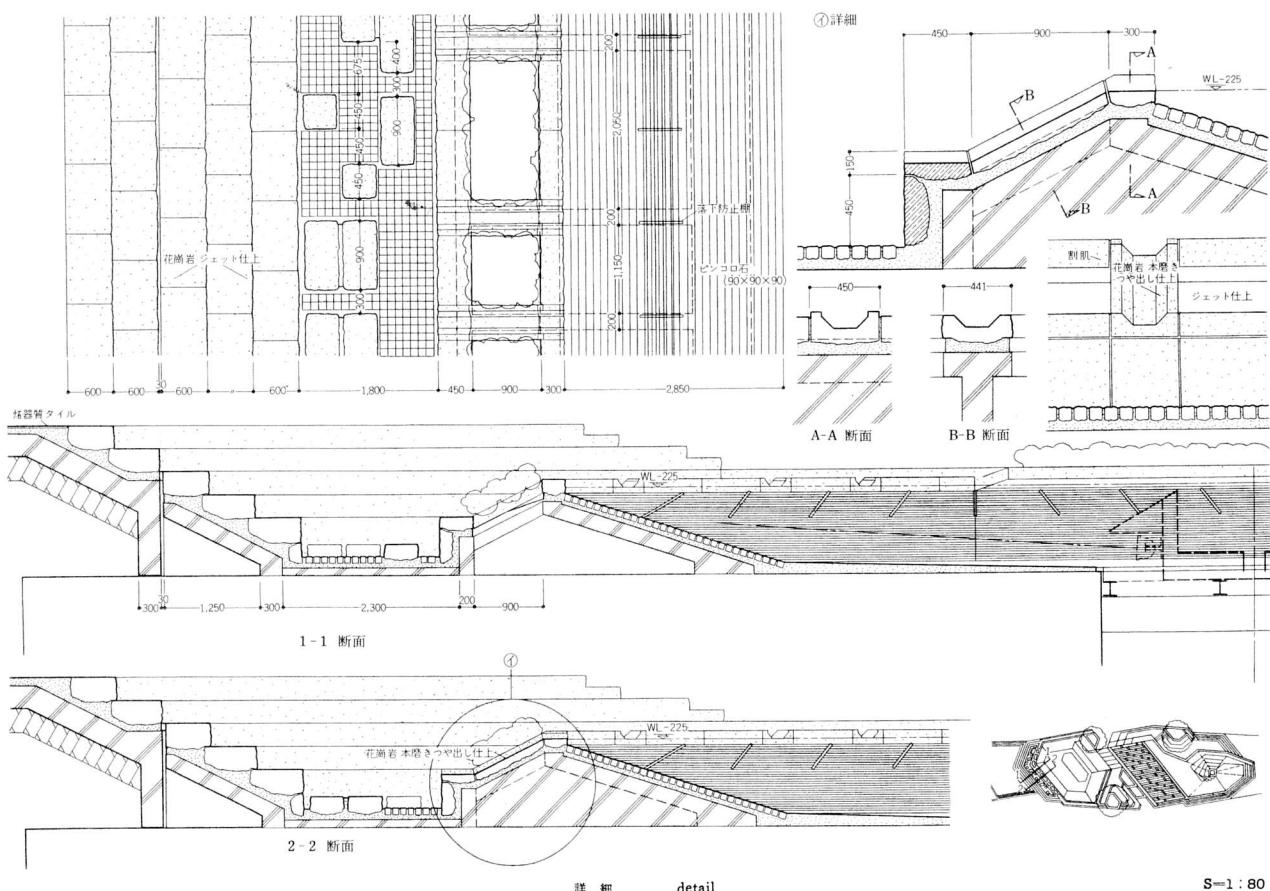
22. 淀み（溜り）の部分の渦と階

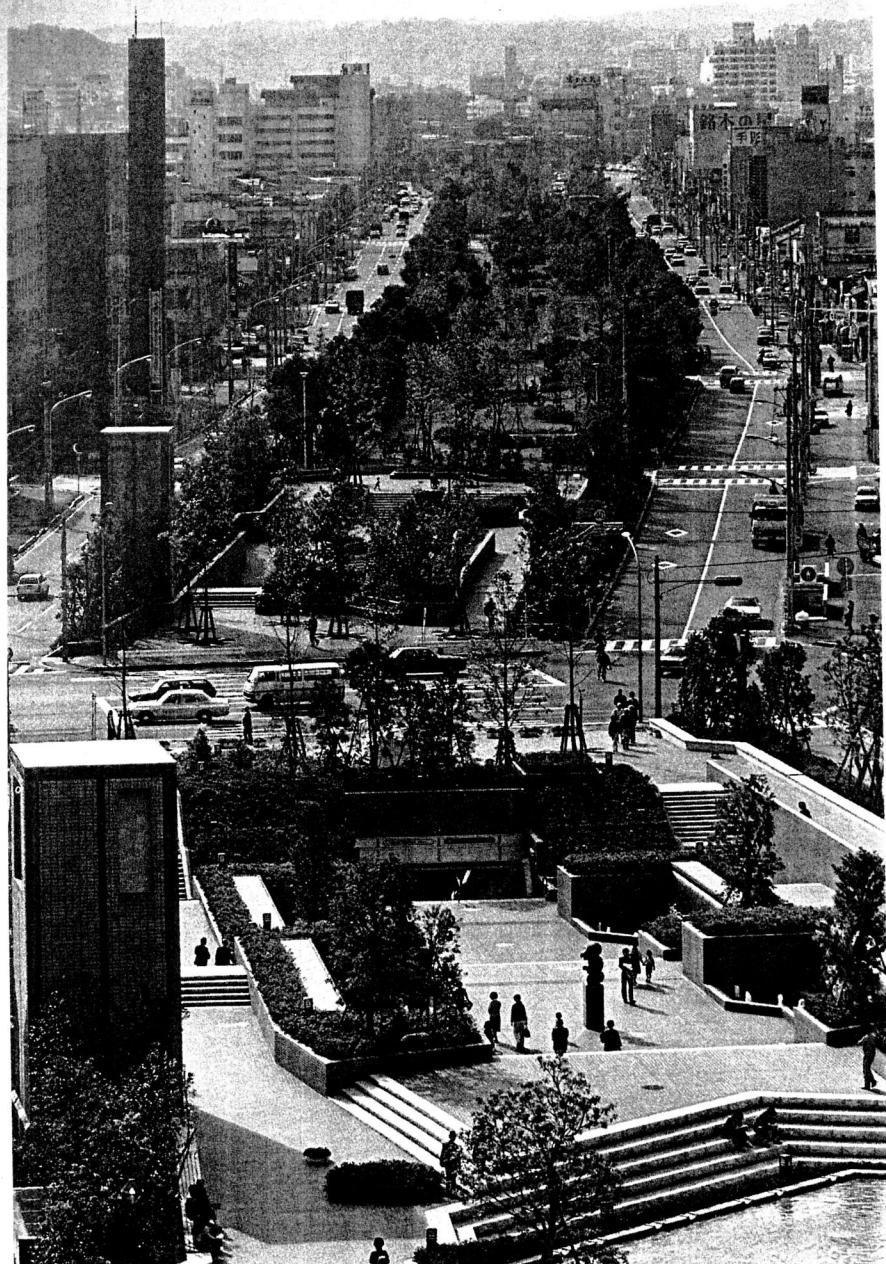




Photos : T. Waki

23. 水の広場を南西側から見る





24. サンクンガーデンとみどりの森

サンクンガーデンとみどりの森



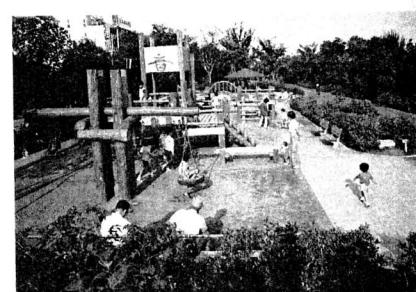
25. みどりの森とサンクンガーデン



26. みどりの森

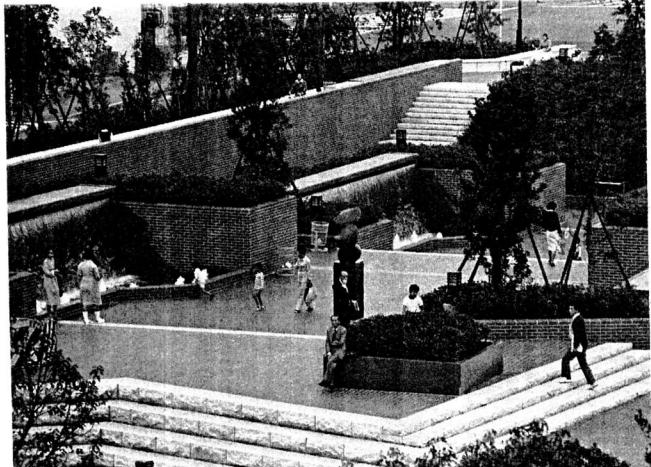


27. みどりの森のベンチ

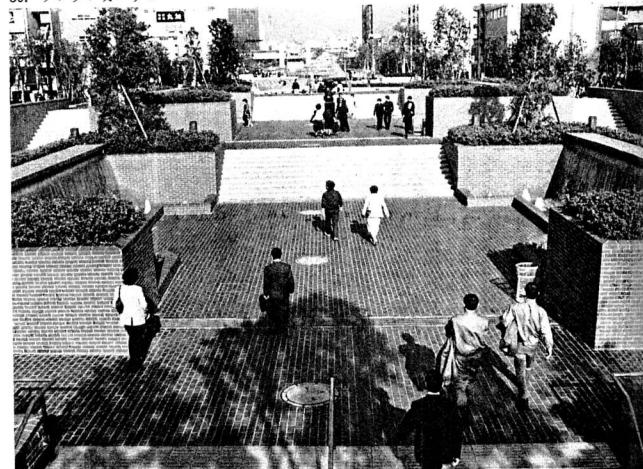


28. みどりの森につくられた子供の遊び場

29. サンクンガーデン



30. サンクンガーデン



建築文化

KENCHIKU BUNKA

DEC. 1978

VOL. 33, NO. 386

群馬県立図書館・甲南大学図書館

厚木市文化会館・横浜市大通り公園

瀬尾文彰／環境論ノート⑥

シュルツとリンチと〈環境のイメージ〉

特集記事

カーテンウォール技術の再評価

中央自然 262-0050

横浜市立図書館



2016743090